

福島県PTA連合会会報
第87号_H24.03.08

第87号

福島県PTA連合会
編集/調査広報委員会
印刷/泉印刷所

PTAふくしま

「活動スローガン実践」より



～ 秋に延期しての「大運動会」～

体育館で行われた地域あがての行事



《主な記事》

特集「くじけないで」③	P 2～5
第35回子ども災害事故防止習字・ポスター展	P 4～5
事務局より	P 6

〔提供 郡山市立上伊豆島小学校 PTA〕

PTA活動への期待



福島県教育庁社会教育課長

瀬谷 真理子

今年度で十年目となる「十七字のふれあい事業」は、「はばたこうきずな確かめ未来へ」とをテーマに実施し、約三万二千組の応募がありました。中でも震災の経験を踏まえて、共通の思いを表現した作品が多く、最優秀作品も五作品のうち二作品が震災を踏まえた作品でした。

しい子どもの姿、そしてその子どもたちを愛情深く支える両親や祖父母の姿があり、温かく見守る地域の方々の存在があることを実感いたしました。

「たくさんさんの支援に誓う恩返し（中島和枝）」「災害で無くした物と得た心（中島悟）」（母と子・県立磐城桜が丘高等学校三年）、「塩むすびにぎり続けた手が赤い（荒章太郎）」「被災地で心にしみる塩むすび（荒雄こ）」（子と父・相馬市立向陽中学校三年）

各学校PTAの皆様方におかれましては、この震災によって新たな課題の数々に対して、子どもたちのために、教職員と保護者の方々、そして地域の方々との連携を深めながら、これまで以上に活発に活動されていることと思えます。子育ての仲間同士とも言える保護者の皆様方が結束を固め、課題と向き合い、子どもたちのために一丸となつて取り組まれることで、PTA活動として、さらなる活性化が図られているのではないのでしょうか。

震災は、私たちに大きな傷を残しましたが、一方で子どもたちは、助け合い思いやる温かな心、人と人との絆の大切さなど多くのことを学んだようです。寄せられた作品をおして、目の前の現実としつかり向き合い、そこから一歩踏み出そうとする明るくたくま

未来を担う子どもたちの豊かな育ちをめざして、学校・家庭・地域が連携し合い、子どもが育ちあう地域社会が築かれることを願っています。

集

「くげなぐで」③

◆東日本大震災 新潟・福島豪雨災害その後◆

東日本大震災、その後

福島市立野田小学校PTA会長

三浦 康 伸

「すぐにでも避難するべきです。」震災後開催された保護者会で、ある保護者が発言しました。「今、私たちの地域の放射線量はとても危険な数値です。子どもたちが心配ではないのですか?」

気持ちには良く分かる気がしました。けれど、会長として私にはその言葉に全面的に賛同することは出来ません。「今の放射線量が安全か、危険かを判断するには、私は素人ですので結論を述べられません。危険だと判断なさるのであれば、避難することを止める理由は私にはありません。しかし、他の方になぜ逃げないのかと責めるのは止めてください。逃げたくない人もいれば、逃げられない人もいます。何よりも、子どものことが心配ではない親はいません。」私は今年度初めてPTAの役員になりました。まさか、自分が会長を務める年にこんな大震災が発生するとは思ってもみませんでした。起きてしまったことを悔やんでも仕方がありません。起きてしまったことには対応する

しか方法はないのです。私は日頃から『不十分な情報とそこから来る勝手な思い込みが、進むべき道を見失わせる』と考えています。私たちが直面した放射線問題というものも、ほとんど分からずじまいの放射能に対する知識と、知識不足にあおられた漠然とした不安とが、私たち保護者本来選ぶべき道を見失わせている部分があるのではないかと日々感じています。事実、保護者会でも、当初、『誰が責任を取ってくれるのか?』という方向で話がスタートしました。

『子どもの責任を負えるのは、最終的に保護者しかいないのです。』たとえ、東京電力が保障するとしても、被害者となった子どもたちを私たちが助けることは保護者である私たちだけです。実際に、校庭で授業をするに当たり、将来の子どもたちの健康について校長先生に保障してもらおうという話まで出ましたが、『三十年後、子どもたちがガンに侵されたとして、九十歳が目前の老人になった校長先生に何を保障してもらえますのですか?』と私は問い正しました。

どんな保障を約束されても、実際に被害を被るのは子どもたちです。私たち保護者は、子どもたちが可能な限り被害を被らないように選択し、もしも被害を被ったらそこから救い出してやるのが責務であり、『どこかの誰か』に責任を押し付けても、私たちの子どもたちは救われません。

結局、保護者は選択すると同時に、その最終責任を負わなければならないことは忘れてはならないと思います。

原稿を書かせていただいているこの時点で、震災から十一月が経過しました。保護者の皆さんと野田小学校を取り巻く沢山の方々のご支援を頂き、校庭の除染作業も仮設校舎への移転も済み、野田つ子たちは今日も学校に通っています。新一年生が通うまでには本校も含めた市内の通学路の除染も進むことでしょう。被災した北校舎は解体作業が進んで半分ほどの大きさになってしまいました。二年後には新しい校舎となって生まれ変わります。

いろんな意味で元通りではないけれど、それでも子どもたちを取り巻く時間は進みます。今この時点においては、子どもたちの明るく元気な声を聞くことができることが、人災といわれる災害を未然に防ぐことが出来なかった大人として、保護者として、唯一の救い

なのかもしれません。

一人の人間として、すべてのことが出来るわけではありません。けれど、子どもたちがそれぞれに人生を振り返った時に、ただ『不幸だった』と言わせないように、『いろいろあったね』と少しほほえむことが出来る程度には人事を尽くしたいものです。

これからもご指導、ご支援よろしくお願い申し上げます。

三校分散から校舎開校へ

伊達市立保原小学校PTA会長

宮 口 知 宏

未曾有の東日本大震災では、我が保原小学校の児童は、学校の適切な指示により、八百名近くの児童全員がけがもなく、避難できず。PTAとして学校の対応に心から感謝をしている。

大被害を受け倒壊する恐れから保原小学校が使用できなくなった。学校とともに、今後どのように学校を再開するか校長先生をはじめ役員とともに対応に奔走した。最初は、市からは、昨年度閉校した学校などを活用し分散することになった。PTAとしては保原小学校を分散しないために地元の公的施設を活用するかプレハブの設置をお願いすべく市当局に要望した。

結果、学校は、分散でのスタートに決定した。当初分散のための

通学バスが用意できないことから、いったん学区内の桃陵中学校に全校生がお世話になることになった。中学生と小学校生合わせて千三百名が一つの校舎で学校生活を送ることになった。一年生は、百三十六名の五クラスと一緒に武道場で座卓で勉強した。江戸時代の寺子屋を思わせるものだった。その一ヶ月後に三校分散になった。

保原小学校は、現在新校舎を建設中であり、この三月一日には開校する運びとなっている。その目標のもとで三校分散での厳しい状況でもPTAとしても積極的に学校に対しての理解と支援にあたりてきた。震災から守ってくれた旧校舎とのさよなら会をはじめ、心に焼きつくイベントも行った。

さて、現在、子どもたちの健康調査が進められている。約一年が過ぎ、保護者の意識にも温度差が見られてきている。が、将来を担う子どもたちの健全育成のために、最大の関心をもち、取り組んでいきたい。



桃陵中学校での1年生

地域共同で、確実な歩みを

須賀川市立第一小学校父母と
教師の会会長

円 谷 誠

須賀川市立第一小学校は、東日本大震災で隣接する大黒池側に校庭の半分が崩落し、校舎は使用不能になり、一学期は低学年が須賀川二小へ、高学年は須賀川一中に間借りしてのスタートでした。二学期から市の並木運動場に仮校舎が整備され、児童五百七十九名が共に学ぶ環境がようやく整ってきました。

この大震災、そして学校創立一四〇周年に当たる今年、本校の当父母と教師の会が「優良PTA文部科学大臣表彰」を頂いたことは、長年にわたる当会の取り組みを受け継ぎ、地域と学校との関係をより深く見直す機会を与えられたものと考えます。

通学路の安全確保、「校舎改築委員会」を組織して新校舎建設場所と設計への提言を行い、放射性物質への対応では、校庭除染の要望を行い、十月に第一回目の校舎敷地除染活動を多くの保護者参加を得て実施しました。この間、当PTAは最善の動きが出来たかどうかと問い直しています。須賀川一小と一中のPTAでは、平成十六年から地域の町内会、育成会、老人会、警察署などと「子どもを育てる会」を年一回開催、登下校の

安全などの課題解決に努めています。地域、保護者で自主的な取り組みをしている地区も多く、見守り活動を行っています。この組織を常に生きたものにし、緊急対応や大きな変化にも対応できるようにすることが、今後一層必要です。

さて、本会の様々な活動の一端を紹介すると、文教、厚生、環境、ベルマーク、特別支援教育の五つの専門部会があり、年二回のPTA新聞「桜水」を発行、給食の修繕や各種催事の準備、補導活動、奉仕作業、ベルマークは毎年収集活動で大きな成果を挙げています。各学年委員会では毎年地域行事への参加、職場体験などを企画し、社会活動を重視しています。音楽体育特別活動後援会は、児童の特設部活動を物心両面で支えます。今年度の特設活動部は限られた活動の中で奮闘しました。

体育館も使えない中、夏休み直前に本格練習を開始した合唱、マーチングバンド部は市内外の各種施設を転々として練習に頑張りました。マーチングバンド部は昨年について全国大会出場、銀賞受賞まで勝ち取りました。各特設活動がここまで行えたことは、子どもたちの大きな自信につながったと同時に、目的に向かって皆でしっかりと力を合わせる須賀川一小の伝統が示されたと思います。

東日本大震災に際して学校の危機管理系統はしっかりと行っていました。PTAも役割を担いました。しかし、先に挙げた地域ぐるみの課題はやはりPTAの出番です。市、県、国の対応がままならない時、最も当事者意識を持った我々PTAが自ら対策を提起し、迅速に係機関と調整する行動力を持ちたいと思います。今後は学校教育活動すべへにおいて変化が予想されます。変化に果敢に対応することが、保護者同士の連帯強化と全員参加につながるものと思います。

子どもたちの笑顔のために

田村市立菅谷小学校PTA会長
郡 司 等

三月十一日に起きた地震により、菅谷小学校は、倒壊こそ免れたものの、校舎・体育館・プールに大きな損傷を受けました。地震が起きたとき、すべての児童が、放課後子ども教室「めだかの学校」で活動中だったため、在校していません。めだかの学校の先生方、菅谷小の教職員の避難誘導により、七十九名全員が無事に校庭に避難することができました。校舎の被災状況からすると、これは奇跡ともいえるものでした。児童の様子を心配した保護者が続々と学校を訪れ、午後四時二十分には、すべての児童が保護者とともに帰宅しました。

し、学校及び田村市教育委員会から菅谷小の校舎で教育活動を継続することは、安全面からも困難であるとの説明がありました。現在廃校となっている船引町の旧栢山小学校へ移転して学校を再開することとなりました。

四月三日、日曜日にもかかわらず、卒業生の保護者も含め多くの会員の協力を得て、菅谷小学校からの備品等の搬出作業が行われました。思



風揚げ

い出多い校舎を後にするこ

とはまさに断腸の思いでしたが、児童にとつて少しでもよい環境で学校を再開させたいとの願いから、参加した会員が心を一つにし、わずか半日で当面の学習活動に困らないだけの備品等を運搬しました。

四月六日、十三名の新生を迎え、新学期がスタートしました。震災に加えて原発事故の影響もあり、今年度のPTA活動は手探りの状態でした。しかし、後ろ向きになるのではなく、児童の安全を第一に考えながら、学校と協力して「やれる方法」を工夫してき

ました。その結果として、「連合大運動会」や「親子たこあげ大会」など、これまで諸先輩方が大切に育ててきた活動を、形を変えながらも、実施できたことは大きな喜びでした。

来年度以降も困難な状況は続くことが予想されますが、子どもたちが笑顔でいられるよう、全会員力を合わせ乗り越えていきたいと思

一歩ずつ、一歩ずつ...

会津若松市立一箕中学校父母と
教師の会会長

羽 金 潤 子

一箕中学校は、地震の影響で校門付近の通学路とプール及びその関連施設が全壊する被害を受けました。校地造成の際の盛り土が地滑りを起こし、校庭にも地割れが走りましたが、校舎に被害は出ませんでした。被害は、二月に入つた現在も復旧工事中で、通学路は卒業式に間に合うように突貫工事中。プールは新年度に着工予定だそう

で、しばらく水泳の授業も部活動もできません。通常の通学路が使用不能になり、校庭を迂回して通学するため、足元のぬかるみがひどく、シューズが泥だらけになる状況でした。そこで、PTA奉仕作業で校庭の一部に山砂を入れ通学用の歩道を作ることで、とりあえずは



校門付近の通学路

足元を確保しました。

また本校は、他校と同様に浜通りや中通りからの避難生徒の受け入れも行いました。受け入れにあたり、PTAとして卒業生を中心に呼びかけ、学生服と通学バッグ、体育着や学用品を集めて、転入生に役立ててもらいました。転入数を大きく上回る品々が集まり、利用いただいた生徒・保護者の方々に喜んでいただきました。

本校としての被害は小さくなかったのですが、主に活動できなかったことは対外的な募金活動と支援の啓発活動でした。保護者が集まる機会をとらえ、働きかけをしてきましたが、さまざまな団体や機関の活動と重なる傾向が強く、十分なものはなかったと反省しています。難しいことですが、今回のような大きな災害への協力では、大きな立場で集約する活動や組織が必要だと感じました。

未曾有の水害を糧に 「新潟・福島豪雨災害」

只見町立只見小学校PTA会長
新 國 誠

本校は、南会津の南西部に位置し「自然首都・只見」をうたっている自然豊かな学校です。只見川流域は、春の芽吹、秋の紅葉と素晴らしい景観を見せてくれます。

その町が、七月二十九日の大豪雨で一変しました。只見川の氾濫で床下浸水二百五十棟、床上浸水百棟、家屋等流出十棟、落橋・通行不能橋七橋など甚大な被害が出ました。児童のいる家屋も十三棟浸水し、ランドセルや教科書なども流されました。全町民に避難勧告が出され、只見小にも三百人を超える方が体育館に避難し、三週間、避難所として開設されました。

PTAとしては、少しでも元氣になればと文教委員会主催によるゴスペルコンサートを開催し、参加者全員で歌って心を奮い立たせました。また、床上浸水された保護者へは、少しばかりですがPTA会費より見舞金を差上げました。何より、学校の教育活動が通常に行えるよう、これまで以上に会員への協力を要請しました。おかげで隔年で実施している全校登山も実施でき、保護者も子どもたちから元氣をもらうことができました。大きな災害があつて改めて感じさせられることは、我々はたくさん

の人の支えがあつて生かされているということ。只見町が水害で避難者が出たとすると、山のよりに支援物資が届いたり、道路や橋が壊れたとなると復旧工事のためにたくさんの方の工事関係者や重機が行き交つたりします。本当に有り難いことです。今年ほど、人々との絆や思いやりが感じられた年はありません。



皆様の励ましや支援に感謝しながら、子どもたちが、学校が明るく元氣に、教育活動ができるよう、今後もPTAとして支えになつていきたいと思ひます。

感謝そして一歩前へ！

南相馬市立鹿島小学校長
門 馬 正 純

平成二十三年三月十一日から十一ヶ月が経過しました。四月二十二日、校庭で遊べない、休み時間が短い、原一小、原二小、小高小、原一中と一緒に体育の時間は週に一回位しかない、本校では、六年生以外は二学期合同で学年一学期の形での学校再開でした。二学期からは二時間校庭で活動できるようにになり、三学期からは、三

第35回子ども災害事故防止習字・ポスター展

三十五回を数えた今回も、温かいご支援とご協力をいただき開催できましたこと、厚く御礼申し上げます。関係の先生方のご理解・ご協力に感謝いたします。

習字の部入賞者

▼小学校の部

- ◆最優秀賞(一年) 松本洋輝(大熊・大野)
- ◆二年 神田優羽(鶴城)
- ◆三年 大西莉央(平一)
- ◆四年 小田切大也(喜多方)
- ◆五年 芥川理礼(金上)
- ◆六年 小山愛由(白河)

- ◆優秀賞(一年) 星崎優希(三神)
- ◆宗像叶夢(芳賀)
- ◆油座日向葵(田人)
- ◆二年 松井菜々美(杉田)
- ◆目黒恭涼(白河)
- ◆太田旭飛(平一)
- ◆三年 飛知和明輝(釜子)
- ◆阿部華怜(本郷)
- ◆高倉大和(中央台南)
- ◆齋藤和奏(五箇)
- ◆森本菜穂(白河)
- ◆四年 押山紗莉(玉井)
- ◆大竹玖実(喜多方)
- ◆菅野佑志(杉田)
- ◆深谷 陸(五箇)
- ◆小林直末(三神)
- ◆五年 成井拓哉(白河)
- ◆佐藤真衣(五箇)
- ◆来栖有優(緑ヶ丘)
- ◆渡辺圭太(郡山・高野)
- ◆山崎暉紗(平一)
- ◆六年 松川佑香(中畑)
- ◆鈴木桃香(いわき)
- ◆夏井 深谷茉莉子(石川)
- ◆浅野 藍(滑津)
- ◆伊藤彩花(杉田)
- ◆優良賞(一年) 上田彩乃(城西)
- ◆齋藤彩菜(五箇)
- ◆市川大貴(郡山)
- ◆白岩 成井茉衣(白河)
- ◆二年 真

審査の先生方(敬称略)

○習字

佐藤 一男(元清明小教諭)

丹治 英郎(元福田小校長)

鈴木 幸子(元蓬萊小教諭)

○ポスター

武田 德行(元渡利小校長)

さか

大野小まつもてひろき

湖水

金上小 芥川理礼

救急

松中 大内美宙

▲小1年 大熊・大野小 松本 洋輝 さん

▲小5年 金上小 芥川 理礼 さん

▲中2年 二本松二中 大内 美宙 さん

船夢菜(棚倉) 川原未裕(須賀川)

佐藤友紀(小名浜)

小田切咲彩(喜多方)

三年 名越美帆(柏城)

瀧口楓香(須賀川)

一 岩瀨 駿(喜多

時間になりました。おにぎり、牛乳プラス?の炊き出し給食が、二期から通常の給食に戻りました。

このように、学習・生活環境が徐々に良くなってきていることは事実ですが、現在は、小高小、金房小、鳩原小、福浦小、真野小、小高中と鹿島小が一緒です。このような状況でほぼ一年、大きな事故や怪我もなく過ごせたことを「すごい」と思っています。児童一人一人が、先生方が、保護者の皆様が、地域の方々が、力を合わせ一つになり、我慢したり、協力したり頑張ってくれたおかげだと嬉しく思っています。

これまでに、日本各地、世界各国の人達から、支援の品物、励ましのお便りなど、沢山の元気を頂きました。また、普通では見られない、聞けない、体験できないことも沢山ありました。自衛隊の吹奏楽演奏会、ピアノ演奏会、落語・マジック・曲芸の公演会、けん玉講習会、ミュージカル鑑賞、「アシモ君」特別授業など、様々な支援のイベントを開いていただき、楽しいひとときを過ごすことができました。ありがとうございました。

夏休みには、南相馬市PTA連絡協議会が中心となり、「南相馬子どものつばさ」実行委員会が組織され、北海道から沖縄まで日本各地で、ベトナム、シンガポール、スリランカで、リフレッシュできるプログラムを提供していただきました。

した。外で遊べなかった、プールで泳げなかった子どもたちが、伸び伸びと活動し、様々な貴重な有意義な体験をすることができました。関係した日本各地の地域の方々、外国の方々、事務局の方々、心より感謝いたします。

様々な形で、「みんなが私たちのことを応援してくれている」という希望と勇気をありがとうございます。今までのご支援や励ましに感謝し、これからもみんなで力を合わせて、一歩ずつ前へ進んでいきたいと思えます。

新たな一歩

いわき市立永崎小学校PTA会長

川 端 進

一、はじめに
東日本大震災発生時、児童は下校しており、地震直後に先生方が安全確認や避難誘導のためにすぐに動いてくださったこともあり、全員が大きなケガもなく無事だったことが何よりだと感じている。

永崎小学校は、永崎海岸にほど近いこともあり、校舎一階部分が一・五m程浸水し、校舎内の机やイス、教材教具等は海からの漂流物や砂、泥にまみれ壊滅的な状況であった。三月十二日に校長先生や先生方と一緒に校地内に足を踏み入れたときのあまりの変わりようににまさに声も出ない状況だったことを今更ながら思い出される。

二、PTAとしての協力
まずは、PTA会長として何が出来たか、何をしなければならぬかを考えたときに、学校のために役立ちたいというその一念だった。PTA会員に呼びかけて、がれきの撤去作業や清掃活動等の奉仕作業も行ってきた。

また、四月からは近隣の江名小学校に校舎の一部をお借りしていることもあり、江名小学校のPTA奉仕作業に協力する形で一緒に奉仕作業もしてきた。

二学期になり、運動会や学習発表会等の学校行事で子どもたちのたくさん笑顔が見られたことは我々保護者としては一番うれしかった。またその運営にも少しはあったが、係としてPTA役員が携われたことは意義深いことであった。

三、おわりに
江名小学校での学校生活も十一ヶ月が過ぎようとしている。先日、校長先生から三月には校舎の改修工事も終了する見通しが立ち、帰校できるとのお話を伺い、ほっと安堵したしだいである。
帰校するにあたって、子どもたちの机やイス等を運ぶ作業がでることだろう。先生方と協力しスムーズに引越しが出来るようPTAをまとめていきたい。永崎小学校PTAの底力を、まともに今こそ見せるときだと思っている。

ポスターの部入賞者

▼小学校の部

- 方二) 大竹 楓(夏井) 穂積志音(関辺) 大島勇作(矢吹) 坂井侑樹(富田西) (四年) 吉田冬花(小名浜) 一橋本佳奈(緑ヶ丘) 中野愛美(棚倉) 三輪陽菜多(浅川) 影山卓也(仁井田) 今泉美柚(夏井) 渡辺 壮(平) (五年) 遠藤祐香(小名浜) 阿部愛海(柏城) 森本颯太(白河) 中村彩恵(みさか) 渡辺真奈美(いわき・夏井) 佐藤絹子(喜多方) 佐川雅晃(棚倉) (六年) 倉鎌優香(玉川) (高橋康介) (五箇) 澤井萌恵(戸) 神野藤颯汰(玉井) 吉田 開(棚倉)

▼中学校の部

- 倉) 村上梨沙(三春) 長谷川笑(城西)
- ◆最優秀賞(一年) 車田成永(玉川) (二年) 大内美宙(二本松) (三年) 佐藤真珠(野田)
- ◆優秀賞(一年) 松川理沙(矢吹) (二年) 潮地 萌(矢吹) (三年) 薄井聖人(五箇)
- ◆優良賞(一年) 鳴瀬裕美(会津学鳳) (二年) 佐藤晴佳(五箇) (三年) 江川美沙紀(喜多方)



中一年 浅川中 矢内 優穂さん

- ◆最優秀賞(一年) 樋口光太郎(喜多方) (二年) 谷井駿斗(釜子) (三年) 座間貴之(須賀川) (四年) 齋藤あずさ(多田野) (五年) 則貞菜々美(鶴城) (六年) 大野 萌(須賀川・大森)
- ◆優秀賞(一年) 薄井太希(五箇) (二年) 坂本 楓(釜子) (三年) 秋葉舞

- 白(富田西) (四年) 蛭田和佳奈(中畑) (五年) 高橋麻綺(関辺) (六年) 馬場佑果(小金井)
- ◆優良賞(一年) 飛騨理子(喜多方) (二年) 町田にこ(須賀川) (三年) 若井奈々(須賀川) (四年) 橋知輝(塩川) (五年) 山浦奈々(関辺) (六年) 鈴木柚衣子(五箇)

▼中学校の部

- ◆最優秀賞(一年) 矢内優穂(浅川)
- ◆優秀賞(二年) 岡本遥子(浅川)
- ◆優良賞(二年) 鈴木瀬奈(棚倉)



▲小6年 須賀川・大森小 大野 萌さん

集

「くげなぐで」③

◆東日本大震災 新潟・福島豪雨災害その後◆

東日本大震災、その後

福島市立野田小学校PTA会長 三浦康伸

「すぐにでも避難するべきです。」震災後開催された保護者会で、ある保護者が発言しました。「今、私たちの地域の放射線量はとても危険な数値です。子どもたちが心配ではないのですか？」

気持ちには良く分かる気がしました。けれど、会長として私にはその言葉に全面的に賛同することは出来ません。「今の放射線量が安全か、危険かを判断するには、私は素人ですので結論を述べられません。危険だと判断なさるのであれば、避難することを止める理由は私にはありません。しかし、他の方になぜ逃げないのかと責めるのは止めてください。逃げたくない人もいれば、逃げられない人もいます。何よりも、子どものことが心配ではない親はいません。」

しか方法はないのです。

私は日頃から『不十分な情報とそこから来る勝手な思い込みが、進むべき道を見失わせる』と考えています。私たちが直面した放射線問題というものも、ほとんど分からずじまいの放射能に対する知識と、知識不足にあおられた漠然とした不安とが、私たち保護者が本来選ぶべき道を見失わせている部分があるのでないかと日々感じています。事実、保護者会でも、当初、『誰が責任を取ってくれるのか?』という方向で話がスタートしました。

『子どもの責任を負えるのは、最終的に保護者しかいないのです。』たとえ、東京電力が保障するといつても、国が支援するといつても、被害者となった子どもたちを私たちが助けることは保護者である私たちだけです。実際に、校庭で授業をするに当たり、将来の子どもの健康について校長先生に保障してもらおうという話まで出ましたが、『三十年後、子どもたちがガンに侵されたとして、九十歳が目前の老人になった校長先生に何を保障してもらえますのですか?』と私は問い正しました。

どんな保障を約束されても、実際に被害を被るのは子どもたちです。私たち保護者は、子どもたちが可能な限り被害を被らないように選択し、もしも被害を被ったらそこから救い出してやるのが責務であり、『どこかの誰か』に責任を押し付けても、私たちの子どもたちは救われません。

結局、保護者は選択すると同時に、その最終責任を負わなければならないことは忘れてはならないと思います。

原稿を書かせていただいているこの時点で、震災から十一月が経過しました。保護者の皆さんと野田小学校を取り巻く沢山の方々のご支援を頂き、校庭の除染作業も仮設校舎への移転も済み、野田つ子たちは今日も学校に通っています。新一年生が通うまでには本校も含めた市内の通学路の除染も進むことでしょう。被災した北校舎は解体作業が進んで半分ほどの大きさになってしまいました。二年後には新しい校舎となって生まれ変わります。

いろんな意味で元通りではないけれど、それでも子どもたちを取り巻く時間は進みます。今この時点においては、子どもたちの明るく元気な声を聞くことができることが、人災といわれる災害を未然に防ぐことが出来なかった大人として、保護者として、唯一の救い

なのかもしれません。

一人の人間として、すべてのことが出来るわけではありません。けれど、子どもたちがそれぞれに人生を振り返った時に、ただ『不幸だった』と言わせないように、『いろいろあったね』と少しほほえむことが出来る程度には人事を尽くしたいものです。

これからもご指導、ご支援よろしくお願い申し上げます。

三校分散から校舎開校へ

伊達市立保原小学校PTA会長 宮口知宏

未曾有の東日本大震災では、我が保原小学校の児童は、学校の適切な指示により、八百名近くの児童全員がけがもなく、避難できず。PTAとして学校の対応に心から感謝をしている。

大被害を受け倒壊する恐れから保原小学校が使用できなくなつた。学校とともに、今後どのように学校を再開するか校長先生をはじめ役員とともに対応に奔走した。最初は、市からは、昨年度閉校した学校などを活用し分散することになった。PTAとしては保原小学校を分散しないために地元の公的施設を活用するかプレハブの設置をお願いすべく市当局に要望した。

結果、学校は、分散でのスタートに決定した。当初分散のための

通学バスが用意できないことから、いったん学区内の桃陵中学校に全校生がお世話になることになった。中学生と小学校生合わせて千三百名が一つの校舎で学校生活を送ることになった。一年生は、百三十六名の五クラスが一緒に武道場で座卓で勉強した。江戸時代の寺子屋を思わせるものだった。その一ヶ月後に三校分散になった。

保原小学校は、現在新校舎を建設中であり、この三月一日には開校する運びとなっている。その目標のもとで三校分散での厳しい状況でもPTAとしても積極的に学校に対しての理解と支援にあたりてきた。震災から守ってくれた旧校舎とのさよなら会をはじめ、心に焼きつくイベントも行った。

さて、現在、子どもたちの健康調査が進められている。約一年が過ぎ、保護者の意識にも温度差が見られてきている。が、将来を担う子どもたちの健全育成のために、最大の関心をもち、取り組んでいきたい。



桃陵中学校での1年生